

龍谷大学
経済学部教授
竹中 正治

映画に見るアメリカ社会の苦悩と希望

アメリカは変わるか、映画「グラントリノ」が日本人に突き付ける問い:掲載タイトル

クリント・イーストウッドの主演・監督映画の最新作“Gran Torino”の日本でのロードショウが4月下旬に始まり、映画館に見に行った。ため息をついてしびれた。良くも悪くも、映画にはその時代を代表するような作品があり、世間の雰囲気、思潮を鋭く反映している。ずっとアメリカ映画を見続けている私には、過去10年間で右から左へ、驕りから自戒、そして再生へと向かう流れを感じる。ちょっと振り返ってみよう。

アメリカの驕り、絶対悪 vs. 絶対正義

1996年のアメリカSF映画「インディペンデンス・デイ (Independence Day)」は、地球に襲来した異星人の侵略に対して、かつて空軍の戦闘機パイロットだったアメリカ大統領自らが戦闘機に乗り、戦闘機部隊を指揮して戦う物語だ。映画の最後に異星人撃退を果たした日を「ニュー・インディペンデンス・デイ」として祝う。

この構図は、絶対悪（地球を侵略する異星人）に対して人類の自由と独立を防衛する「絶対正義」の戦いである。その先頭に立つのがアメリカであり、アメリカ人による祖国の防衛が、絶対悪から世界人類の自由を取り戻すための戦いと何の疑いもなく同一視される。そういう意味で、「アメリカ帝国のイデオロギー」が、無邪気かつ露骨に横溢した映画だった。

この映画が発信するイメージは「異星人」を「テロリスト」に置き換えれば、ブッシュ大統領が9.11以降の幾つもの演説の中で繰り返したビジョンそのものである。この映画が封切られたのは1996年であり、2001年の9.11大規模テロの5年前である。9.11テロを受けてブッシュ大統領はテロという「絶対悪」に対する宣戦布告を行った。映画のビジョンは対テロ戦争として現実のものになった。

秘められた含意: 帝国主義への風刺

弊著「ラーメン屋 vs. マクドナルド」(新潮新書、2008年)で取り上げたが、この映画との対比で見ると興味深い含意を秘めているのが、2005年にスピルバーグ監督によって映画化された新版「宇宙戦争 (War of The Worlds)」である。

スピルバーグ監督は、異星人襲来という恐怖の臨場感を盛り上げるために、9.11テロをアメリカ人に想起させる様々な仕掛けを映画の中に巧みに設定した。ところがそうした判りやすい仕掛けのうちひとつ奥に、9.11とは対極をなす別のイメージを仕込んだ。映画の中で、異星人の超ハイテク兵器が轟音を発し、夜の闇に閃光が走り、市民は逃げ惑い、パニックとなる。それを見ているうちに、

米軍のハイテク兵器の攻撃にさらされたバクダット住民の恐怖も、この様なものだったのではなからうか....という直感が強烈に浮かんできたのだ。

スピルバーグが 9.11 テロを想起させて恐怖感覚を煽る仕掛けのもうひとつ奥に潜ませた含意が、ここにある。原作のH・Gウェルズの「宇宙戦争」は、当時のイギリスによる植民地支配の寓話でもあり、非西欧世界にとっては大英帝国とはこの宇宙人のような存在ではないかという、皮肉で知的な問いが隠されていたという（藤原帰一「デモクラシーの帝国」岩波新書 2002 年）。スピルバーグはウェルズが原作に託した含意を見事に今日のアメ리카に当てはめて復元したのだ。しかし、この映画を見てそこまでくみ取れたアメ리카人は決して多くはなかった。

人類から地球を守る？

2008 年に封切られた「地球が制止する日 (The Day When the Earth Stands Still)」は、やはりオールド SF ファンには懐かしい同じタイトルの 1951 年の映画のリメイク版である。オリジナルの 1951 年版は冷戦と原水爆戦争の危険に対する警告のメッセージが強かった。

2008 年版では、ニューヨークのセントラルパークに宇宙から飛来した球状物体(宇宙船)が着陸する。中から出てきたのは銀河の超高度諸文明からの使者クラートゥと巨大ロボットである。使者クラートゥとの会話で、米国の国防長官が「our planet」と言うと、クラートゥは不思議そうに首をかしげて言う「your planet?」。またヒロイン役のヘレン博士(ジュニア・コネリー)が「あなたは人類の友人なのか、それとも敵なのか？」と問うと、「私は地球を救いに来たのだ」と答える。

ところがその意味するところは、地球という惑星にとって破壊的な存在と化した人類から惑星地球と人類以外の生物種の救済が彼のミッションであることがやがて明らかになる。そして人類滅亡プログラムが作動を始める。

物語はもはや秘められた含意としてではなく、アメ리카を舞台に、より直接に人類の存在のあり方の是非を問うわけである。地球を侵略する異星人＝絶対悪という構図は 180 度逆転し、人類は裁かれる立場に置かれる。映画の中でクラートゥに対して、ヘレンがまだ人類には望みがあると弁護して口にする「We can change」というセリフが、オバマ大統領の選挙期間中のフレーズそのままだ。これはあまりにダイレクト過ぎて、ちょっと興奮めであるが・・・。

昔「荒野の用心棒」、今「グラントリノ」

そして今年(アメ리카での封切りは昨年暮れ)登場したのがクリント・イーストウッド監督・主演の「グラントリノ(Gran Torino)」だ。今のアメ리카が抱える諸問題、戦争の傷、民族間の偏見と対立、父と子・世代間の確執、宗教のあり方、自動車産業の凋落まで、様々な諸相がこの映画では「イーストウッドの映画人生」という大鍋で煮込まれてシチュエーションになったような味わいがある。

主人公のウォルトはポーランド系の白人アメ리카人だ。1950 年代初頭の朝鮮戦争に出兵し、部隊のほとんどが戦死するような激戦を戦い抜き、勲章をもらった。戦後は自動車メーカー、フォードの工場で組立工として定年まで働いた。フォード社の 1972 年版グラントリノを愛し、今でもピカピカに磨き上げ、愛車にしている。引退し、デトロイトの郊外の住宅地ハイランドパークに住んでいるが、長年連れ添った妻が亡くなった。

ウォルトは、日本でも絶滅危惧種になっているような超頑固じじいだ。祖母の葬儀で教会にへそ出しルックでやってきた(しかもへそにピアスまでしている!)孫娘にブチ切れそうになり、二人の息子とその家族との関係もうまくいかない。長男がトヨタのカーディーラーをやっていることも我慢ならない。

このじいさん、人にはうるさいくせに、自分は“ファッキング・イングリッシュ”で民族差別用語をスプリンクラーのように撒き散らす。癩癩を起すと口をへらの字に曲げてまず「ウ～」と犬のように唸り出す。むかつくと人前でもペツと唾を吐く。映画好きならご存じだろうが、マカロニ・ウエスタンの主演時代から、唾吐きはイーストウッドのトレードマークだった。

妻に先立たれ、ひとりになったウォルトの家の隣にはインドシナの山岳民族モン族の兄弟、姉のスーと弟のタオ、母、祖母が住んでいる。モン族はベトナム戦争時代に米国の工作で共産主義勢力を敵に回して戦うことになり、米国の撤収後、祖国を追われ、難民化して米国に移住した。ウォルトは自分の街から白人が減り、アジア人やラティーノ(中南米からの移民とその子孫)などばかり増えるのが気に入らない。

これはまさに米国の人口動態を象徴している。米国政府(Census Bureau)の人口データのトレンドを未来に延長すると、米国は2050年前後までには白人が総人口の50%を割り、マイノリティー(黒人、ラティーノ、アジア人など)が50%を超えるという逆転が起こる。このままでは米国は文化的アイデンティティーの危機に直面すると訴えたのが、例えば保守派の学者サミュエル P ハッチントンである(「分断されるアメリカ(Who are we?)」2004年)。

頑固じじいウォルトはタオとスーに関わり始めることで、次第に心を開き、変わり始める。味わい深い物語というのは、多義的な含意を放つもので、この映画についても見る者の立場次第で様々な異なった受け止め方があり得るだろう。私がこの映画から受けたハイライト的なメッセージとは、相手がいかに非道であっても暴力による脅しは報復の連鎖と悔恨をもたらすだけだ、ということだ。

生と死

映画の中でウォルトが心の奥に抱える重い罪の意識が次第に明らかになる。彼は朝鮮戦争で多くの敵兵を殺した。その一人はまだ少年でほとんど降伏しかけていた状態だったが、彼は撃ち殺してしまった。その罪の意識が彼を生涯苦しめる。

この映画のひとつのキーワードは、神父とウォルトの会話で登場する「生と死(life and deaths)」という言葉だろう。若い神父が口に「生と死」という言葉に、ウォルトは応えて言う。「若造のお前に生と死の何が判るんだ」「あなたは判るんですか?」「俺は戦場でそんなものは嫌になるのほど見て来たんだ」「それは『死』ですね。『生』については?」「・・・結婚して、子供を育て、家族を持った・・・」「そうですか、『死』の方が多いようですね」

タオは従兄弟とその仲間のギャングどもから執拗に絡まれ、彼らを拒んだことから虐待される。既にタオの父親気分になっていたウォルトはギャングのひとりをぶちのめして銃を突きつけて脅す。「今度タオに手を出したら、ただじゃ済まないぞ」ところがギャングどもは逆恨みして、タオの家に銃弾を撃ち込み、外出していたスーを暴行、レイプしてしまう。

暴行され、ボロボロになって家に戻ったスーの姿を見て、ウォルトは自分の暴力的な脅しがとんでもない報復を招いたことに衝撃を受ける。警察は調査するが、住民は報復を恐れてか口を閉ざし、犯人を特定することもできない。

「ギャング」を「テロリスト」に置き換えれば、イーストウッドのメッセージは明白だ。相手がいかにか非道であっても暴力による脅しは報復の連鎖を生むだけだ。ウォルトはそう理解したのだ。ではどうしたらいい？ この後、ウォルトの選択は意外な結末へと展開する。まだ見ていない読者のために結末の全部は明かさないのでおこう。

映画の結びのメッセージは「死から生」である。捨ててこそ救って残せるものがある。福音書に描かれたイエスの受難物語はイエスの死でクライマックスに達するが、そのメッセージは救済と再生だった。ウォルトとギャング達との対決のシーンは、マカロニ・ウエスタン映画の対決シーンを想起させる。しかし、それは意外な展開を経て福音書のイメージで終わる。

過去の何を捨て、未来に何を託すか

結末を言えないのがもどかしいが、ウォルトが自分の心の深い傷、罪の意識を償い、誇りを回復したことは確かだ。同時に彼は過去の何かを捨て、未来に向けて何かを救い、何かを託したのだ。何を？ウォルトが投げ捨てたものは「力による恫喝」と「民族的な偏屈」言えるだろう。振り返ってみれば自分の父母、あるいは祖父母も移民としてこの国に渡って来たのだ。街の床屋の「イタ公」も、建設現場監督の「アイリッシュ野郎」もそうだ。

彼は自分の人生を歩き始めたばかりのスーとタオにこの国アメリカで生きる勇気と希望を与えた。「この国(アメリカ)は世界中からやって来た移民とその子孫に、ハードワークと独立心を代償に、自由と繁栄を与える土地だ。これまでもそうだった。そして未来も」そういうセリフは映画の中では一切出てこないが、これは多くのアメリカ人の琴線にふれる信条だ。

それを言わずに感じさせるところが、この映画の出来栄の素晴らしさだろう。ウォルトは自分とその祖先が継承して来たこのスピリッツをタオとスーの世代に託したのだ。タオもスーも決して人生に挫けることのないタフなアメリカ人に育つだろう。

ひるがえって、私達日本人は未来に向けて、何を捨て、何を救うべきなのだろうか？戦後の日本は古い国であると同時に若い国だった。戦争で多くを失い、都市は焼け野原になったので、全てを一から建設するしかなかった若い国だった。そこに戦後日本の成長のダイナミズムもあったのだ。人口も経済も成熟、老熟した今、成長するためには私達もこれまで大切だと信じてきた何かを投げ捨て、不確実な未来を信じて何かを託す必要がある。そういう気がしてならない。

以上